

2020年7月5日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「“霊”の火を消してはいけません」

聖書：テサロニケの信徒への手紙一5:12～28

この手紙の時代背景には、「信教の自由」が脅かされ、「皇帝崇拜」の強要があった。その状況下でパウロは、「キリスト再臨」(4:13～18)を語る。キリスト者にとってどんなに希望の光、信仰の支えとして語られていたことか。ただ、いつどの時期に来るのかと次の興味が湧いて来るが、パウロはこう記す。「兄弟たち、その時と時期についてあなたがたには書き記す必要はありません」(5:1)と。続けて警えを用いる。キリストの再臨を「盗人」に。私たちは普段、盗人が来る時だけ戸締りをするのではない。いつ来ても大丈夫なように毎晩戸締りをするもの。それは習慣である。パウロは私たちに、そのような習慣を大事にしているではないか。毎週、教会に集まり、主を賛美し、御言葉に傾聴し、礼拝を捧げているではないか、今はそれで十分だ、そのように礼拝を大事にしろとすることが、パウロの呼びかけであり今朝の5章12節からの言葉になる。

この言葉は、教会に語り掛けている。牧師だけではない。教会に集う一人ひとりに語り掛けている。互いにいつも喜び合う、絶えず祈り合う、どんなことにも互いに感謝し合う。次に来る言葉「“霊”の火を消してはいけません」とは、いつも喜び、祈り、感謝し合う、その時に聖霊の御業が働き、聖霊の火が燃え盛ることを言っている。この度のコロナの影響は、教会の「“霊”の火を消して」しまい兼ねないほどの騒動であったかと思う。教会に集まれない、教会から遠のいてしまう生活が強いられ、心が教会から離れかねない状況が作られかけた。これから第二波、第三波が必ず来ると言われるが、私たちは聖書の言葉から教えられ、忍耐して行くことが出来ればと願う。

最後に、「“霊”の火を消して」しまうものは、様々な状況で起こりうる。今、香港の社会情勢を案じてならない。先週、中国政府による香港の抗議デモ取り締まりなど、統制強化を目的とした「香港国家安全維持法」が成立した。香港の将来に関わる問題であるにもかかわらず、香港で議論することなく決められた。この民主化運動に若い学生たちが「雨傘運動」としてたたかっている。実は2017年頃だったかと思うが、この雨傘運動を展開している大学生が(10名)、沖縄の平和運動を学びに来られた。私も講師の一人として彼らに話した。彼らはクリスチャンで、牧師がゲート前でゴスペルを歌って抗議活動をしているとして、興味津々に聞いてくれた。ただ基地ゲート前でゴスペルを歌って、聖書を朗読し、お祈りする。拳を上げて叫ぶことはしない。そんな運動に落胆したのか、「そんなことで何が変わるんですか？」と質問した学生がいた。たしかに彼らの激しい運動からすれば、なまやさしい行動かもしれない。私はその時に「力に対して力で向かうことは、私は違うかと思う」とい

う話をしたかと思う。彼らが今、どのような状況なのかとても案じている。彼らの命が守られるように、彼らの「霊の火」が消えないように祈る。(神谷)